



教育学部

准教授 古田 弘子さん

Furuta Hiroko

●プロフィール

- 1982年 大学で英語を学び卒業。
- 1984年 大阪教育大学特殊教育特別専攻科で学んだ後、出身地の岐阜にある難聴幼児通園施設にて勤務。退職後、筑波大学大学院入学。
- 1993年 同大学院修士課程修了し博士課程に進むが、JICAの派遣でスリランカへ。
- 1999年 筑波大学大学院博士課程修了。熊本大学教育学部に勤務。熊本大学教育学部助教。

海外で働くと、自分の可能性が広がる。

自分の力で成長したい

大学で英語を学ばれた古田さんは、卒業後、大阪教育大学特殊教育特別専攻科で学び、地元の岐阜で難聴幼児通園施設に勤務されました。当時は、仕事をする女性のロールモデルがあまりなく、どのような仕事をしていくか悩む中で障害児教育に出会ったそうです。毎日、ジャージ姿で仕事をした職場は、10人中9人が女性職員でした。耳の聞こえない幼児にコミュニケーション手段を身につけさせる教育とその親へのケアが仕事内容でした。そこでは、経験豊かなすばらしい女性上司と出会い、ずいぶんきびしく鍛えられましたが、その職場にいる限り、どうしても上司に頼ってしまう自分に気づきます。そして「もっと学びたい、自分自身の力で成長したい」と思い、退職して大学院へ進みます。

アジアの障害児教育の道を開く

32歳で筑波大学大学院に進学、修士課程を修了し、同大学院博士課程に進んだ1993年、古田さんはJICA（Japan International Cooperation Agency・国際協力機構）からスリランカへ派遣されます。スリランカでは2年間、国立教育研究所に勤務しました。そこでの仕事は、ひとつには耳鼻科のない田舎へ行き、子どもたちの聴力検査を行うことでした。防音室もなく、お寺を借りて検査をしたそうです。もうひとつは、聴覚障害児を持つ親たちに向けて「障害があっても教育は受けられる」という内容の啓発ビデオを制作する仕事でした。スリランカでも尊敬できる上司との出会いがありました。スリランカのような貧しい国で、「どんな子どもでも教育を受ける権利がある」と情熱を持って仕事に取り組む姿から、古田さんがこの道でこれから生きていくための勇気をたくさんもらったそうです。そして、それ以外の多くの人々との出会いを通して、ますますスリランカを理解するようになり、好きになっていったといいます。それ以来ほぼ毎年スリランカを訪問し、日本であまり行われていないアジアの障害児教育の研究を開拓してきたそうです。

学生からも教えられる

「従順でおとなしい」「いい子」は日本人女性の特徴と言えますが、海外に出て仕事（ボランティアでも同様）をしてみると、そういった特質は役に立たないといいます。ですから、自分自身の力量や可能性を広げるためにも、「一度、海外に出てみることを勧めます。自分自身の新たな面を発見できますから」と。現在、教育学部で特別支援教育教員養成に携わっていますが、大学教員という仕事は、学生から新しい発想を得て、一緒に学べるところが良いとおっしゃいます。しかしながら、大学という職場は未だに男性中心にまわっているところがあり、女性差別に立ち向かう強さも女性研究者には必要だそうです。そういう中で、女性教員とのネットワークを少しずつ構築するように努力しています。また、山歩き、ジョギングが趣味で、11月1日の阿蘇遠歩には毎年参加しています。



スリランカ、北西部州社会事業局運営の障害児通園施設を訪問して